

との論證を中心に、カイムトツなる人物像のアウトラインをえがいたにとどまった。

今回は、この十六通——土地貸借六、農産物貸借七、棉布貸借二、土地讓渡一——の證文内容についてその後さらに考察を加えたところを報告し、中世トゥルファン地方の一地主としてのカイムトツ像を、より具體的に把握する補いとした。關連してウイグル文書にあらわれる土地問題について若干の問題を指摘したい。

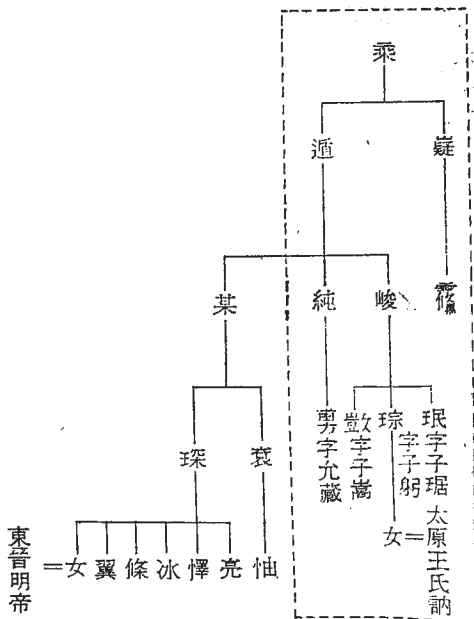
魏晉代の潁川庾氏について

多田 狷介

東晉代明帝の庾皇后の兄亮は、王導・王敦らに對抗する政界の重鎮であり、西府軍團の領袖としてのその地位は弟冰・翼へと繼承された。潁川鄆陵の庾氏が、いつごろに起源し、いかなる人々のどのような歩みによって一個の門閥貴族へと成長したのかをあとづけることが本報告の主題である。但し、今回は庾氏全盛の庾亮らの一つ前の、西晉末年の世代迄を一應の範圍とした。潁川庾氏という一個の事例からひき出される知見が、一般に門閥貴族制の形成期とされているこの時期の全體的認識とどの程度相互に流通してくるかが確かめたいところである。さらに、門閥への形成過程における學問教養——儒學や老莊——の機能と意味、「八王之亂」以降の混亂期における同族内個々人の處生と命運といった點にも觸れられたらと思っている。

〔潁川鄆陵庾氏略系圖〕

點線内がほぼ、今回の報告範圍



清代臺灣の水利組織について

森田 明

清朝は三藩の亂に次いで康熙二十二年（一六八三）、鄭氏の抗清運動を抑え臺灣を領有下におき、中國支配を確立した。臺灣領有はその後雍正・乾隆へと展開される清朝支配の Extension の一環であった。時あたかも清朝は封建支配體制の相對的安定期を迎え、人

口の激増は乾隆末には三億に迫ったが、一方耕地の擴張は限界に達し、更に國外移住の禁止や、官僚・地主・商業資本の土地集中、貨幣經濟の浸透等による内的諸矛盾は、滿洲・蒙古と並んで臺灣へも多數の人口移動をもたらし、「新開地」の形成を促した。

臺灣開發の發展は、清朝の移民・開拓政策によって規定を受けざるを得なかったが、それにも拘らず、抑制的消極的な康熙・雍正期において、未開拓の中・北部へと全島的な開發の據點と端緒がすでに開かれている。開發過程は先ず土地開墾であるが、その生産力化には水利開發（埤・圳の設定）が不可欠であり、兩者は相互规定的に進められた。

當初の土地所有における墾戸・佃戸關係と並んで、水利開發においては開發者たる埤・圳主と引水者との間に、水租納入を前提とする用水保障の契約關係が成立していた。埤・圳主の水利權は、土地業主權とは別個の獨立した私的・物權的權利であった。しかし、かかる當初の水利關係は、その後の歴史的諸條件ともなう土地所有關係の變化（一田兩主制の成立）と共に、著しい變化を見るに至っている。ここでは水利組織の形態的變化を、その管理者たる埤・圳長の性格を通じて考察しようと思う。

この考察によって、他の「新開地」にも見られる若干の共通した特殊性の反面、中國における社會集團とその近代化過程の解明に、試験管的な手がかりが得られるのではなからうか。同時に又、清代臺灣の社會經濟的把握は、それによって規定されざるを得なかった、日本の臺灣植民地支配政策の志向と特徴をも明らかにする一素材となるであらう。

金の景祖について

三田村泰助

金の景祖は金朝六代目の君主とされ、その事跡は金史世紀にみえる。いま池内宏博士の金史世紀の研究によると、景祖に關する世紀の記述はすべて史實とはみなし難く、ただ景祖その人のみは實在したと斷じている。

しかし博士の景祖紀についての史料批判には疑問がある。例えば景祖が平定した世紀所載の五國蒲轟部について、遼史の該當記事に蒲奴里部とあることから、五國部に蒲轟部は存在しなかつたとく。だが蒲奴里部はまた噴訥・盆奴里とも寫され、問題の蒲轟も同音異譯とみなしてよく、この理由のみからこの記事を否認しえないと思う。そしてその内容からは、景祖と五國部との關係をしりうるのである。つぎに世紀は景祖の支配下にある部衆名に、白山・耶悔・統門・耶懶・土骨論および五國部長をあげている。これに對し、博士はその事實なしとされた。おそらく當時阿勒楚喀にいた金室完顔氏が、このような東南遠隔の地域を支配したとは考えられなかつたからであらう。だが金室の阿城移住の時期に定説がなく、景祖のときは、金室はなお阿城に移らず、その東方にいたと解すれば、世紀の上述の記事は強ち否定されるべきではなからう。

それでは景祖のとき、金室はどこに居たかといえ、その解明は景祖のもつ官職名から推定されよう。景祖の名は世紀に烏古迺とあ